

研究ノート

プロヴァンスにおけるミストラルのシンボル化に関する一考察 *1

安達 未菜 *2

1. 序—問題提起

「…過去 15 年間に登場した文学、歌謡、書き物、雑誌など諸々の文化活動は歴史的なシンボルの複合体を練り上げてきた。そのシンボルの複合体は、一方でかつてはオクシタニアと呼ばれたであろう地域の過ぎし日の栄光を呼び起こし、他方では批判的な立場とした、異なる文明と言語によって絶えず政治的な支配に傾倒してきたフランスへの非難を表明したのである。」¹ N. B. スミス

上のスミスの一節は、フランスの「一体性と多様性の“矛盾した混合”」²なる特質の一端をうかがわせて興味深い。これが 1978 年の著作の一節であることを考えれば、第 2 次世界大戦後 20 年ほど経った時期でもなお南フランスが、自らの地域への自負と中央への反発というかつての意識を保持していることがわかる。フランス革命以後に近代国民国家形成に向けて展開した国家統一化政策による求心的同化に対する反動は、革命以後 1978 年に至るまで根強く残っているのである。

同時に、この一節は別な意味で 19 世紀のフランスの一断面をも反映させている。それはシンボルの問題である。スミスは、人間営為により生み出された諸文化の総体をシンボルと捉えている。シンボルの定義および機能の詳細については次節で検討するが、本稿では人間文化や思考を表出し、見るものに働きかけるものをシンボルとする。19 世紀のフランスにおいては、それ自体が為政者やその体制や権力までをも表して民衆を誘導するといったシンボルが重要な役割を果たしている。

第 2 節で述べるように、フランス革命の標語である“自由”(liberté) と“平等”

*1 本稿は筆者の以下の修士論文の「第 4 章 「フェリブリージュ」におけるミストラルとその神格化」を展開させ、内容に加筆、修正を加えたものである。

安達未菜、「南フランスの「フェリブリージュ」運動とフレデリック・ミストラル
—19 世紀におけるナショナリズムと地方文化復興運動について—」、東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期、修士論文、2017 年 3 月。

*2 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程後期 2 年次

(égalité) は一つのシンボルとして打ち出され、その下での国家統一に向けてときには支配的政策までもが進められた。また、ナポレオン 1 世はアンシャン・レジームから引き継いだローマ皇帝カエサルをシンボルとし、自らのイメージに重ねてその威儀を維持しようとした。ナポレオン 3 世は同じカエサルをシンボルとしながらも、その為政の中でガリアの英雄ヴェルサンジェトリクスを国民シンボルとして位置づけたが、それは第三共和政において近代国家形成に利用されている。19 世紀フランスにおけるシンボルは、その“発信者”と“受容者”的関係性のなかで国家の方向性に大きな影響を与えてきたと考えることができる。

このシンボルを介する関係性からスミスの一節を振り返ると、地域における歴史的文化活動が形成してきたシンボルの重要性が垣間見られる。とくに第 3 節で述べる南フランスにおけるオクシタン語つまり狭義にはプロヴァンス地方の言語を中心とする文化活動は着目に値する。なかでも 19 世紀後半以来その文化活動の一つの大きな中心を担ってきたのは文化言語復興団体であるフェリブリージュ (Félibrige) である。彼らのプロヴァンス語による詩文の伝統の継承とプロヴァンス文化の復興活動はとりわけ 19 世紀に活発となった。現在に残るフェリブリージュの文芸などは、スミスの指摘する“歴史的なシンボルの複合体”であり、それはプロヴァンス地方のすべての人々にとってプロヴァンスの文化的価値を高めたものと認識されている。同時に、19 世紀においては文化言語復興団体とその活動そのものをシンボルとする存在もまた不可欠となる。第 4 節では地方のシンボルを考察する。フランス国家では、為政者がガリアの英雄あるいはジャンヌ・ダルクを戴いてシンボルとしたように、フェリブリージュそしてプロヴァンス地方もまた自らを表現し諸文化活動の要となるシンボルを必要としたのである。

本稿で扱うのはまさにこの問題である。フェリブリージュは、南フランスの代表的詩人であるミストラル (Frédéric Mistral : 1830-1914) と彼の師であるルーマニユ (Joseph Roumanille : 1818-1891) を創設者とすることで知られている。しかし、ある時期からはミストラルが、この団体とその活動である文化言語復興運動のシンボルとして扱われる。第 5 節と第 6 節で述べるように、それはあたかもミストラルを“崇め奉る”ともいいくべきある種の“神格化”的相を呈する。確かにフランスにおいては、ヴェルサンジェトリクスにしても、また、ジャンヌ・ダルクにしても、前者はフランスの祖国ガリアの英雄であり、後者はフランスの愛国者として神格化されてきた。それでは、一国家における一地域のシンボル的存在、それも神格化されるほどの存在とはいかなるものであろうか。本稿では、国家と地域の関係性をも

ふまえながら、プロヴァンス地方復興のシンボルとしてのミストラルについて検討する上での一試論を提示する。

2. 19世紀フランスにおけるナショナル・シンボル

シンボル（象徴）とは記号の一つであるが、それは人間にとてどのような意味をもつのであろうか。ドイツの哲学者であるカッシーラーは人間を「シンボルを操る動物」(animal symbolicum) とし、以下のように指摘する。

「シンボル的な思考とシンボル的な行動が人間生活の最も特徴的な姿の一つであること、そして、人間文化の進歩の全体がこれらの条件に基づいていることは否定し得ない。」³

人間は、「新しい形式のもの—シンボル的想像およびシンボル的知性—を発展させ」⁴、その操作によって、世界に能動的に関与してきた。すなわち、人間は自らに関わる社会やそれを含む世界を受動的に捉えるのではなく、人間精神のみがもつ能力すなわち、シンボル機能 (symbolic function) によって、さまざまな文化諸領域などを体系的に知覚し、世界に能動的に関わっていく。カッシーラーはこのようにして人間をシンボル機能によって世界を知覚し意味づけし、そして文化形式を変化させることも可能であると捉えた。すなわち、カッシーラーは人間の特徴をシンボル操作とし、人間社会や人間文化をシンボル的性格によって定義した。そして、“記号”（シグナル signal）と“シンボル”（symbol）を区別し、「記号は物理的世界の一部をなすが、シンボルは人間にとての意味世界を形成する」⁵と述べている。したがって、人間の言葉によるコミュニケーションやさまざまな文化営為のなかで発せられたシンボルは意味世界を構成する。

しかし、シンボルの機能を考えると、それが構成する意味世界から人間が何かを受け取ることも事実である。すなわち、こうしたシンボルはその“発信者”と“受容者”的関係性をもち、シンボルが創り出す意味世界は他者に働きかける。人間がある対象を目にし、その対象から表象を得るその全てがシンボルであるなら、その意味世界は人間の思考や行動に何らかの影響を与えることになるのである。本稿では、シンボルを記号それ自体が人間文化や思考、理念を表出し、見るものにそれを彷彿させ、働きかけるものと定義する。すなわち、こうしたシンボルは見るものに作用し、

新たな世界を創出させうる。こうしたシンボルは、まさしく国家形成においても機能する。

19世紀のフランスはこうしたシンボル機能を見出す顕著な例となる。実際、フランス革命を経て近代国民国家形成へと向かうフランスでは国家統一化政策の下でさまざまなシンボルが提示され、民衆意識の高揚や政略的誘導の一端を担う。たとえば、1794年におけるグレゴワール神父（Grégoire）の演説では、国家言語としてのフランス語統一を正当化するために、地域言語であるパトワ（Patois）が徹底的に否定される⁶。その際に用いられるのは“自由”（liberté）という言葉のシンボル化である。すなわち、革命を果たした“フランス国民”にとっては、フランス語こそが唯一“自由のための言語”（la langue de la liberté）であるという論理である。ここでの“自由”（liberté）という言葉は、一方では国家を一つの方向へと誘導しながらも、他方では結果として国家の近代化という国民の期待に応え得るものであるということができる。

本稿では、こうしたシンボルのうち、とくに為政者や体制によって国家や国民を方向付ける意図をもって用いられ、また、受容されたシンボルをナショナル・シンボルと呼ぶ。とくに革命後のフランスにおいては、シンボルの機能がとりわけナショナリズムの形成すなわち国民意識を一つの方向に導くために、あるいはフランス共和国と民族の統一性を強調するために用いられた。

こうしたナショナル・シンボルは、以下のような二つの性質、あるいは二面性を内包する。

その一つは、次のような様相を呈する。ナショナル・シンボルとは為政者によって国家あるいは国民を誘導する意図をもって発信されたシンボルであり、為政者や体制の力によって肯定的に方向付けられ、操られたシンボルである。B. アンダーソンは、国民あるいは民衆に対して体制の力によって肯定的に方向づけられたナショナリズムを“公定ナショナリズム”と呼ぶ⁷。すなわち、公定ナショナリズムは為政者や体制が自らの下で国家を位置づけるために打ち出したナショナリズムであり、民衆に肯定的に働きかける。そして、公定ナショナリズムは為政者や体制が提示するシンボルをも特徴づける。すなわち、それこそが為政者と国家を価値づける意図をもって操作されたナショナル・シンボルである。それゆえに、こうしたシンボルは、それが表象する対象とその意味に対する賛美を民衆が共有し得るように一ときにはそのように仕向けられて一形成されたものである。

もう一つは、それ自体がフランスの革命精神を反映する国民に向けてのシンボル

である。ここでの国民は共同体の一員としての意識をもつ全ての人々を指す。したがって、全フランス国民が共通した意識を有するという在り方がナショナル・シンボルにも表れてくることになる。

こうしたナショナル・シンボルの顕著な例は、ローマ皇帝カエサルとヴェルサンジェトリクスに見出される⁸。ナポレオン1世率いる第一帝政においては、ローマ皇帝カエサルをナショナル・シンボルに戴く。このシンボルはルイ14世以来アンシャン・レジームをとおしての伝統を引き継ぐものであり、その意味ではそこに既にナショナル・シンボルの前身が見出される。ナポレオン1世はローマ皇帝の威厳や権威を自らに重ねて民衆に提示するが、それはフランスを栄光に導く「皇帝」ナポレオンとしてのイメージを民衆に刻み込むことを意図したものである。二月革命を経て成立する第二帝政においても、ナポレオン3世はボナパルティズムとともにこのシンボルを継承する。しかし、それと同時に、1865年頃からかつてのローマ帝国とガリアの戦場であるアレジアを発掘し、ガリアの英雄ヴェルサンジェトリクスをもう一つのシンボルとして登場させる。ナポレオン3世はヴェルサンジェトリクスの彫像を建設し、フランスの祖国であるガリアを民衆に誇示するのである。この新たなシンボルは、第三共和政の下ではローマ皇帝にかわる新たなナショナル・シンボルとして位置づけられ、ローマのみに依拠しない自立した近代国民国家としてのフランスを国民に印象づけることに大きく貢献するのである。

一方、19世紀フランスにおいてはナショナル・シンボルとは異なった性格のシンボルも登場する。たとえば、ジャンヌ・ダルクのような歴史的な国家的英雄像や女神像は、国民全体の意識の歴史的基盤として認知されることになる。そのシンボル性は、その意味を解釈する国民自らの主体性の基盤としても、また、それを継承することで自己を捉え直す契機としても国民に働きかける。とりわけ19世紀には、こうしたシンボルが創出されるのだが、他方で諸地方・地域においては固有の諸文化が存在する。そこでは、言語や歴史認識などの文化的に同質な国民形成が求められるこの時期に、それとは異なる地方特有のシンボルを称揚する動きが見られる。

実際、次節以降で述べるように、フェリブリージュの創設者の一人であるミストラルはまさにプロヴァンス復興のシンボルとして捉えられてきた。それは彼自身の意図する範疇を越えてなされたことであったが、フェリブリージュを中心にプロヴァンスの文化とそのアイデンティティ保持を掲げる人々によって、ミストラルの存在そのものが地域復興という一つの意味をもってシンボル化されるのである。

3. フェリブリージュ創設に見るミストラル

フェリブリージュ (*Félibrige*) は、1854年、第二帝政期のフランスにおいてミストラルとルーマニーユを中心に創設されたプロヴァンスの文化言語復興団体である。それは、革命後のフランスにおけるナショナリズムとロマン主義の潮流のなかで生じていた文芸復興の流れをくむものであった。すなわち、プロヴァンス地方とりわけアヴィニョン、エクス=アン=プロヴァンス、マルセイユの各地域の教師や詩人たちを中心とする方言言語と文芸復興を議論する会合をから萌芽する。

フェリブリージュ創設に直接つながるのは1852年8月29日にアルルで開催された第一回詩文会である。これはプロヴァンス詩人たちの統合を目指した合同会議で、復興活動の先駆けとなるものであった。しかしながら、早くも翌年の第二回詩文会では詩人たちの統合が断念されることとなる。その要因は綴字法をめぐる意見対立であり、実際に後にフェリブリージュが結成されるアヴィニョン地域内部においても、詩人たちの間での意見の対立が見られた。それにも拘らず、こうした綴り字の論争を越え、1854年にはフェリブリージュが結成されるのである。

しかし、発足当時のフェリブリージュは、年長者であるルーマニーユを中心とするいわばプロヴァンス地方の詩文と言語の“愛好者集団”的性格が強かったことも事実である。実際には、1862年になって具体的な規約が制定され、会員名簿が作成される。このときになって初めてカプリエ (*Capoulié*) と呼ばれる会長を頂点に、構成員として数名の司祭およびプロヴァンスの歴史と文化に通じた知識人から成る学術的団体へと組織化される。これらの構成員はプロヴァンス全域から招集され、小規模な愛好家の集まりから組織化された団体へと拡大されることになる。ミストラルは、1862年に規約を起草し、以降1883年まで会長に就任している。

フェリブリージュは、ミストラルが『ミレイオ』 (*Mirèio, Mireille*) などの著作によって1904年にノーベル賞を受賞したこともあり、19世紀末から20世紀初頭にかけてミストラルを中心に展開を見せる。しかし、その創設当初に先導者として大きな役割を担っていたのはルーマニーユであった⁹。

ルーマニーユはアヴィニョンのデュピュイ寄宿学校 (*le pensionnat Dupuy*) で教員を務めていた。このデュピュイ寄宿学校には、後のフェリブリージュ創設メンバーの七名のうちの二人であるミストラルとアンセルム・マチュー (*Anselm Mathieu*) が通っていた。ミストラルとマチューは心のうちを話し合う親しい友人であった。そして、ミストラルは、この寄宿学校でルーマニーユと出会うことになる。ミストラ

ルにとってルーマニーユは、プロヴァンス語の詩の創作について語り合う同志であり師となる。このときミストラルは 15 歳で、その後、マチュを含む三人は生涯にわたってともにプロヴァンス地方の復興に専念することになる¹⁰。

このことは、のちのフェリブリージュ創設当初の推進者の中心的人物であるミストラルとルーマニーユの立場を示唆している。それは、二人は師弟関係であり、ルーマニーユが指導的立場にあったという点である。今日で、その文学的活動と功績によってミストラルがフェリブリージュの代表的人物とみなされているが、ミストラルがフェリブリージュの主要人物として注目を集めようになるのは後のことである。むしろ、1850 年代からフェリブリージュの創設当初にかけては、文芸活動における綴り字の制定や詩文会の招集などはルーマニーユのイニシアティブのもとで進められていた。実際、フェリブリージュ創設の基本的指針となる構想はすでに 1847 年のルーマニーユの詩集『雛菊』(*Li Margarideto*) の注に述べられている。また、1852 年に出版された『プロヴァンスの娘たち』(*Li Prouvençalo*) の制作に携わった詩人たちのグループを「幼年期のフェリブリージュ」と呼び、自らの文化言語復興運動を位置づけている¹¹。

しかし、1862 年にフェリブリージュが団体規約を制定する際には、ミストラルがその内容を制定しており、この時期から二人の役割あるいは立場が逆転していく様子が見られる。すなわち、このとき執筆の影響力や団体の指針・方向性の決定権、先導者としての役割を担っていた人物は、ルーマニーユからミストラルへと移行していくのである。ルーマニーユは書店を構えて団体メンバーの出版における援助や執筆活動を行っているが、1862 年以降に設置されたフェリブリージュのカプリエには、初代と二代目ともにミストラルが選出される。ルーマニーユがカプリエとして表舞台に出てくるのは、1884 年になってのことである。

4. ミストラル称揚の始まり 詩人ミストラルのシンボル化の兆候

ミストラルがフェリブリージュにおいてイニシアティブをとるようになる契機は、第二帝政半ばの 1859 年に見られる。その発端は、アドルフ・デュマ (Adolph Dumas: 1806-1861) との出会いにある。

デュマは 1855 年に当時の文部大臣フォルトゥールから南仏の民謡を収集するよう依頼され、翌年プロヴァンスの地に赴き、20 年来の知人であるルーマニーユを訪問する。そして、その直後にミストラルを訪問する¹²。おそらくはルーマニーユ

が「プロヴァンス語の詩を作っている」人物がいると、ミストラルを紹介したものと思われる。デュマの訪問を受けたミストラルは『マガリの歌』(Cant de Magali)と執筆中の『ミレイオ』の数編を朗誦する。この日のことを、ミストラルは自叙伝のなかで、「フェリブリージュの詩人たちの行方を見守る、幸福の星に導かれて」¹³デュマの訪問を受けたと回顧している。この日以来、デュマが亡くなる61年まで二人は文通を交わし、デュマからミストラルに宛てられた最初の一通目の書簡には詩人ミストラルと出会った喜びを綴っている¹⁴。こうしたデュマとの出会いは、ミストラルがアカデミーと接点をもつきっかけとなる点で重要である。すなわちデュマは、フランス・ロマン派の詩人、小説家であるヴィクトル・ユゴー (Victor-Marie Hugo) やアルフレッド・ド・ヴィニー (Alfred de Vigny)、アレクサンドル・ドュマ・ペール (Alexandre Dumas Père)、ジュール・バルベイ・ドールヴィリー (Jules Barbey d'Aurevilly) などの名立たる詩人たちと親交を持ち、さらにはアルフォンス・ド・ラマルティーヌ (Alphonse de Lamartine) の秘書を務めていたのである。

ミストラルは『ミレイオ』が完成すると文壇の巨匠に序文を依頼すべくパリへ赴き、その際にデュマのもとにも訪れる。デュマは、ラマルティーヌを紹介し、ラマルティーヌが『ミレイオ』を『文学講和』(Cours familier de littérature) の中で賛辞を込めて紹介するのである¹⁵。そこには、フランス語版の『ミレイユ』に描かれた情景によって、プロヴァンスの低地一体の自然と人間の心が相互に輝き、それを描き出す言葉は永遠のものであると記されている¹⁶。ミストラルはラマルティーヌに対する感謝を込めた賛辞として四行詩六節から成る詩を作成する。『ミレイオ』はすでに同年9月には第2版が発行され、そこにはプロヴァンス語の発音とその綴りに関する案内が掲載されるとともに、ラマルティーヌへの賛辞の詩の第四節が巻頭を飾っている。

このようなミストラルの叙事詩に対する賞賛は、週刊誌『祖国』(Patrie) にも掲載されたが、その一方でパリの新聞にも『ミレイユ』の記事が掲載された。すなわち、ミストラルは叙事詩『ミレイオ』とともに文学界にて名声を博すこととなるのである。さらにはアカデミー・フランセーズから1861年8月にモンティヨン賞（三千フラン）を授与され、一躍ミストラルは脚光を浴びることとなる。ミストラルの南仏プロヴァンスの詩人としての躍進は、フランスにおけるロマン主義の潮流のなかに位置付けられ、また見出すことができる。

しかしながら、ミストラルはその後直ちにパリ文壇やアカデミーに受け入れられていったわけではなかった。その理由は、1865年頃にはミストラルが連邦主義を信

奉していたことにあった。この頃のミストラルの思想、信条は、1867年に刊行された叙事詩『カランダル』(Calendau)にも表れている。福留が述べるように、フランスでは「『フェデラリズム』という言葉は、反革命と結び付けて語られ、『一にして不可分の共和国』を否定するもの」¹⁷として捉えられていた。そのため、ミストラルの連邦主義の主張は、とりわけ1866年から1868年にかけて分離主義者として激しく非難されたのである。

1877年、政府により漸くフェリブリージュが公式団体として認められるが、ミストラルは、1879年頃まで中央だけでなく地方の新聞や雑誌においても「反動主義者」、「フリーメイソン」、「分離主義者」などと非難されていた。さらに、モンペリエ(Monpellier)においては1881年に反フェリブリージュの年鑑『復活祭の卵』(L'Iou de Pascas)が刊行される。同時に、ミストラルの連邦主義は、フェリブリージュの創設当初の関係者であった人々からも批判されるようになる¹⁸。

こうした状況のなか、ミストラルに対する批判が鎮まっていくのは、1868年以降で、ミストラルが徐々に表立って連邦主義の主張を控えていくことによる。ミストラルが公的な場において政治的立場として中立を表明することは、純粋な文学者としての「ミストラル」という存在を再び際立たせることとなる。それというのも、ミストラルはフランス・アカデミーから1861年にモンティヨン賞を、そして1863年にはレジオン・ド・ヌール五等勲章を授与されており、詩人ミストラルに対する評価はすでにあったのである。詩人ミストラルの称賛はその後も高まり、ミストラルの生前中に立像が建てられるのである。このことはミストラルがプロヴァンス文化復興のシンボルとして、彼自身の存在が神格化されたとさえ感じられる。神格化(apothéose)とはある対象を不変の存在として称揚し、崇め奉ることを意味するが、とくに晩年のミストラルに対しては、彼自身がシンボル化され、彼の思いや意志、行動を超えてすでにプロヴァンスを守護する特別な意味づけがなされていた—その意味では“神格化”がなされた—と考えられるのである。こうした問題に対し、次節ではミストラル神格化の様相がいかなるものであったのかについて考察する。

5. フランス国内におけるミストラル称揚の拡がり

詩人としてのミストラルはすでにアカデミーから評価を得ていたが、プロヴァンスにおいては、第三共和政初頭までミストラルに対する情熱的な賛美はそれほど際立ったものではなかった。そのことを如実に表している一つは、ミストラルの叙事

詩『ミレイオ』のオペラ化である。『ミレイオ』は 1864 年に初めて上演されるのが、そのオペラの上演地はプロヴァンスではなくパリであった。南フランスで初演されたのは実に 1880 年になってからのことである。次節で述べるように、この頃にはミストラルの存在が、フランス国内のアカデミーにおいてだけでなく、プロヴァンス内部においてもその興隆に重要な役割を担う存在として認知されていくからである。

福留によれば、1862 年のフェリブリージュの組織化の際には、創設時メンバーの政治信条や思想の不統一性を内包しており、組織の取り持ち役として内部分裂を抑制していたのは政治的柔軟性をもつミストラルの存在であった¹⁹。

そのようなミストラルがフランスにおいて評価され、賞賛されることにはプロヴァンスにも影響をもたらした。それは、ミストラルの作品の文学的評価が、詩文を含むプロヴァンス文芸への評価として捉えられたからである。したがって、この時期におけるミストラルへの賛美は、フェリブリージュのみならずプロヴァンスにおける共同体意識の創生を促すものでもあったと考えられる。さらには、こうした「ミストラル賛美」は、単に団体内部に対する効果だけではなく、逆にフランス国家に対してもプロヴァンスの文化や言語の良さを主張する上での効果としても期待されていたことが推察される。

1894 年 8 月 11 日、「アフレコ橋の鼓手」(*Lou Tambour d'Arcolo*) の銅像の除幕式が開かれる。この「アフレコ橋の鼓手」は、1868 年にミストラルが著した詩で、「フランス国民」の一員であることを強調した愛国的な内容となっている。これは、フェリブリージュ創設当初に好意を寄せていたかつての友人からも分離主義者と非難されたことに対し、こうした批判への対応として書かれたものであった²⁰。

この銅像除幕式が注目に値するのは、この式典に文部大臣（公教育大臣）ジョルジュ・レイイグ（Georges Leygues）が出席していることである。興味深いことに、この式典を主催した大臣は、ミストラルのことを「“アルルの皇帝”(L'empereur d'Arles)」を見たよう感じた」と述べている²¹。この出来事は、フランス政府のフェリブリージュおよびミストラルの活動に対する注目の度合いを示すものであると考えられる。なお、ミストラルはこの時期にレジオンドヌール四等勲章を授与している。

ミストラルがフランス政府やアカデミーから評価されていくにつれ、その賞賛はプロヴァンスにも広がっていった。それは、まさに地域を代表する“英雄”に対する賛美と崇拜であった。すなわち、「ローカル・シンボル」としてのミストラル像が形作

られるのである。ミストラルに対するこのような賛美と崇拝に対し、フランス政府は単に抑圧するわけではなかった。すなわち、フランスの「国民の歴史」の生成と新たなフランス国家および国民の英雄像の形成として目に見える形でのシンボルの提示がなされたこの時代に、ミストラルもフランス国家の一文化を高揚させたフランスの偉人として賞賛されたのであった。それを後押しした大きな出来事は 1904 年におけるミストラルのノーベル文学賞受賞であったが、それはミストラルにフランス国家における国民的英雄という性格を付与することとなった。そのことは、地域主義を掲げる当人の意志とは逆に、皮肉にも彼からフランス・ナショナリズムに対抗するという性格を奪う結果となつた。

6. ミストラルの神格化—ナショナル・シンボルとローカル・シンボルの間で

前節でのべたようなミストラルに対する賛美は、その後も彼をプロヴァンスの「皇帝」と称賛するほど高まっていく。その様子は、プロヴァンスで開催された祭典に顕著に表れている。

その一つが「ヴィエルジネンコ祭り」(li festo vierginenco) で、プロヴァンスの伝統意識を活気づけたいというミストラルの意向を受けて、1903 年 5 月にアルルにおいてが開催された。この祭典は盛況で、翌年 4 月には過越祭の日に合わせて再度祭典が催された。これには 350 人の女性たちが参加し、当初の予想以上の来訪者によって急遽アルルの古代劇場を開催場所としたほどであった。この祭典について、フェリブリージュ会員でプロヴァンス語の詩人、作家であるポール・マリエトン (Paul Mariéton) は、「お祭りとしてはそれほど成功したわけではないが、ますます高まるミストラル主義 (Mistralisme) の大成功としてはすばらしかった」²²と述べている。この祭典はその後も継続され、ミストラルが亡くなる直前の 1913 年まで開かれている。1913 年の最後の祭典はミストラルも出席し、4 日間にわたって盛大に開催された。

次に、ミストラルのシンボル化にとって最も重要な祭典は 1909 年に開催された『ミレイオ』の刊行五十周年記念祭である。この祭典ではミストラルの銅像除幕式が開かれた。このミストラルの銅像設置の計画は、フェリーブル (Félibre)²³のフランドレイジー (M^{me} J. de Flandreysy) たちによってミストラルの承諾を得て、すでに 1886 年から企画されたものであった。その年はミストラルがカプリエの職務をルーマニーユへと引き継いだ翌年のことである。そして、ジュール・シャルル＝ルー

(Jules Charles=Roux) はアルルの自治体に記念像を建設することを提議し、銅像建設に向けて寄付金収集と企画準備の主眼を置いた委員会を立ち上げた。そして 1908 年、ミストラルの誕生日である 9 月 8 日にジュール・シャルル=ルーたちが彼を招待し、計画を実行に移す旨を伝えるのである²⁴。実際、翌年の『ミレイオ』刊行五十周年記念の祝典に合わせて、予定通りアルルのフォーラム広場にミストラルの立像が設置された。この祭典は、とりわけミストラルのシンボル化の大成であったということができる。

ミストラルのノーベル賞受賞はプロヴァンス地方の地域意識を高めることに多大な貢献を果たすが、実際にミストラルは地域の“英雄”的な存在となっていた。そうしたなか、1909 年 5 月 28 日から 31 日にかけてアルルでは『ミレイオ』出版五十周年記念祭が盛大に開催されたが、この祭典には毎日 2 万人の人々が訪れたのである。29 日には、この記念祭に合わせて、ミストラルが自身の最大の“叙事詩”と謳ったアルル博物館 (Museon Arlaten) の落成式が行われた²⁵。この博物館には、プロヴァンスの民謡や伝統的衣装、生活文化などが展示された。すなわちミストラルの述べていたプロヴァンス・ナショナリズムの成果を表すものと言うことができる。さらに、その翌日には、アルルのフォーラム広場にてミストラルの銅像除幕式が行われ、アルルのアレンヌにて『ミレイオ』が上演された。こうして、ミストラルはプロヴァンスの「ローカル・シンボル」として成就したと言える。すなわち、それはプロヴァンスの諸文化と歴史的価値を高め、実直にその復興に取り組んだ敬愛すべき郷土愛を持つ人物として捉えられた。それはプロヴァンス地方の人々が共有すべき精神であり、プロヴァンスの人々の共同体としての意識を高めるシンボルとなったのである。

こうした状況が続くなかで、1913 年に共和国大統領に就任して間もないレイモン・ポワンカレ (Raymond Poincaré) がプロヴァンスを訪れる。大統領の訪問に対し、ミストラルは汽車のなかで昼食を共にする機会を得た。このときポワンカレ大統領は、ミストラルに「われわれフランスの歴史が誇るに足る 1 つの言語と文学の栄光を高めたあなたに、わたしはこんにち共和国と偉大な祖国を代表して深甚の感謝を述べる」²⁶と述べた。この賛辞の言葉は、ある意味でフランス共和国のナショナリズムが、ミストラルのみならずプロヴァンスを国家の中に位置づけようとする意識が反映されていると感じられる。

こうした意識はミストラルが亡くなった 1914 年 3 月 19 日にも見られる。ミストラルの葬儀にフランス共和国大統領が出席する意を述べたのである。葬儀に参列す

るべくフランス政府は、ミストラルが亡くなったその日に、葬儀を24時間遅らせて欲しいという要請をしている。それは、ミストラルの葬儀に国家的なセレモニーとしての性格を与えるためであった。ミストラルの妻であるマリー・リヴィエール（Marie Rivière）は、ミストラルが生前に質素な葬儀を要望していたからとして、政府の依頼を断っている。しかし、ここでも生前のミストラルの意志に反して、大勢の参列者が訪れ、その様相はセレモニーと化し、エクス＝アン＝プロヴァンスの大司教がミサを執り行った。また、共和国大統領は代理の使者を送って追悼の言葉を述べさせた。さらに、葬儀にはフランス・アカデミーも追悼の辞を送り、さらにその他マルセイユやエクス＝アン＝プロヴァンスなどのアカデミーの代表委員も出席し、多くの追悼演説がなされることとなった。しかしながら、この出来事は、ミストラル主義を超えて、ミストラル崇拝すなわちミストラルの「神格化」が完成した瞬間でもあったと言うことができる。

7. おわりに

ミストラルのシンボル化—ある意味での神格化—はフランス国家とプロヴァンス地方の双方においてどのような意味をもっていたのであろうか。

ミストラルはプロヴァンス地方の文芸と言語の復興活動の功績によってプロヴァンス地方の人々に自尊、自立の精神を伸張させた。これまで述べてきたように、ミストラルへの賛美、ミストラルのシンボル化の最初の動きは1886年に見られる。それはミストラルを賞賛する最初の銅像製作であるが、この計画はフェリブリージュのメンバーから湧き上がったものであった。パリのフェリープルたちがミストラルの胸像作成のために拠金し始めるのである。この銅像は“ミストラルの偶像化”であったが、それまでのようにミストラルの作品をモチーフとする偶像とは異なるものであった。それは、プロヴァンス地方にとってのシンボル化を意味したのであり、この地方の文化言語復興の発端であるフェリブリージュの特徴を色濃く反映するものであったと考えられる。

それではフェリブリージュ自身は自らが継承する文化・伝統あるいは歴史についてどのように捉えていたのであろうか。フェリブリージュ創設当初から、その構成員であるフェリープルたちにはプロヴァンスの歴史的背景としてのローマ文化を継承するという意識が存在していた。それは彼らのさまざまな活動において見受けられる。

最初にその意識は、フェリブリージュ創設以前において開催された第一回詩文会にすでに顕著に見られる。それは、この会合の開催地をアルルに決定する理由に関してである。彼らにとってアルルは「ガリアにとってのローマ」であった。実際、アルルにはローマ帝国の属州時代に建造された劇場や城壁などの遺跡群が点在し、それはこの都市がローマ帝国時代に繁栄した面影に出会える場所であった。プロヴァンスの詩人たちはまさにそうしたアルルこそ自分たちにとっての“首都”たる中心地と考えていたのである。

フェリブリージュの1854年創設時における基本方針には、言語、精彩さ、自由さ、国の栄誉、聰明で美しい歴史をプロヴァンスに保存するとある²⁷。敢えて“プロヴァンスに保存する”と主張しなければならなかったのは何故であったのか。それは、フェリブリージュ創設メンバーの一人であるルーマニーユの言葉に表れている。すなわち、この地域の歴史には、南フランスの詩人トルバドール（troubadours）をめぐっていわゆる北フランスのトルヴェール（trouvére）文化の移入による問題が存在していたのである。ルーマニーユは詩集『雛菊』のなかで、この状況を「王冠を奪われた年おいた哀れな女王は無視され、村の粗末な軒下に追いやられた」と表現している。この表現のうちには、南フランスの言語と文化が北フランスの文化に同化しえない異なる特徴をもつという意識を汲み取ることができる。

フェリブリージュ創設に代表される南仏語復権運動の根底にはそうした意識が存在していた。すなわち、フェリブリージュはプロヴァンスの歴史あるいは文化を継承する使命を自らに課していたのである。

このように見てくると、フェリーブルたちによるミストラルのシンボル化が単に作品や文学活動への賞賛から生じたものではないことがわかる。ミストラルは、南フランスの独自の文化を継承し、それを復興、興隆させ、プロヴァンス延いては南フランス独自のアイデンティティへとし昇華させた存在であった。それは、まさにプロヴァンスの守護神あるいは栄光をもたらす女神ならぬ存在としてのシンボル化であったのである。そして、それ故に、そのシンボル化はフランス国民が共有する共通の文化的存在としてではなく、むしろプロヴァンスにおける“神格化”であったと考えることができる。

こうしたミストラルの“神格化”的動きは、第三共和政期、とりわけ近代国民国家成立以降に始まった。それは、まさにフランス政府が打ち出していた单一言語・単一民族、国民国家というスローガンに対立するプロヴァンスの英雄像の出現であった。“ミストラリズム”は、まさしくフランスの英雄像とそのナショナリズムに対抗し得る

プロヴァンスの英雄として形成されたのである。

プロヴァンスの根底にはローマの文化を受け継ぐという姿勢が見出される。ミストラルの神格化はある意味ではプロヴァンスの新たなシンボルの登場であり、これが1880年代に見られることは、ガリアに国民の歴史的起源を求める第三共和政に対抗するシンボルの形成とも見て取れる。果たして、ミストラルの存在あるいは人々の精神、思考のうちにあるその“偶像”は、彼自身から離れて独り歩きするようになっていくのである。ローカル・シンボル、そして神格化されたミストラルは、プロヴァンス地方の人々に地方独自の言語、歴史認識、地域や生活に根ざした知恵—人間文化の形成に影響を及ぼす精神的なもの—、こうした文化的な伝統を受け継ぐ意識と、新たなプロヴァンスの価値観あるいはアイデンティティの目覚めをもたらす一つのシンボルとなった。そこに表象されるプロヴァンスに対する郷土愛なるものはその地方の人々をその意識の下に結集させ、その後の精神性と地域復興活動のなかで脈々と受け継がれている。

現在ではミストラルを象った彫刻などがいたるところに見られる。故郷マイヤンヌ(Maillane)では彼の実家がミストラル博物館(Musée Mistral)として観光誘致の拠点となり、文化言語復興活動の場であったアヴィニヨンではレイ＝パストゥール通り(Rue Louis Pasteur)に石板がはめ込まれ、ミストラルの通った王立高等中学校は今日ではフレデリック・ミストラル高等中学校(Collège Frédéric Mistral)に改名されている。また、アルルのフォーラム広場にはミストラルの銅像が建設され、さらにはプロヴァンスの観光地であるサン・トロペにもミストラルの石板が壁にはめ込まれている。あたかもプロヴァンスの守護神として自らの“パトリ”(祖国)を静かに見守るかのごとくである。

謝辞 本研究を進めるにあたっては、東海大学文化社会学部の中川久嗣教授、同文学部の平野葉一教授にご指導をいただきました。ここに心から感謝の意を表します。



【図版 1】 La maison du Lézard^{*1}

【図版 2】 Arles, Forum

【図版 3】 Saint-Tropez

(^{*1} La bibliothèque municipale, le bureau du tourisme et le centre de recherches mistraliennes.)

参考文献

- Baudin, Gérard, *Frédéric Mistral, illustre et méconnu*, Paris, HC éditions, 2010.
- Cassirer, Ernst, *An Essay on Man*, Yale University Press, 1992.
- Dubuisson, Thérèse, *Madame Mistral, Marie Rivière, l'épouse dijonnaise de Frédéric Mistral*, Les Baux-de-Provence, Éditions Jean Marie Desbois, 2016.
- Échinard, Pierre, *L'Almanach de la Provence*, Paris, Éditions Jacques Marseille-Larousse, 2003.
- Garcin, Eugène, *Les Français du Nord et du Midi*, Éditions Didier et Cie, Paris, 1868.
- Jouveau, René, *Histoire du Félibrige, 1854-1876*, Nîmes, Imprimerie Bené, 1984.
- Jouveau, René, *Histoire du Félibrige, 1876-1914*, Nîmes, Imprimerie Bené, 1970.
- Lamartine, Alphonse de, *Cours familiar de littérature*, 1859.
- Martel, Philoppe, *Les Félibres et leur temps, Renaissance d'oc et opinion (1854-1914)*, Presses universitaires de Bordeaux, 2010.
- Mistral, Frederic, *Mes Origines Mémoires et Récits*, Éditions Aubéron, 2010.
- Ripert, Emile, *Le Félibrige*, Arman Colin, 1938.
- Rostaing, M. Charles, *Correspondance Adolphe Dumas-Fréderic Mistral 1856-1861*.
- Smith, Nathaniel B. (1978), Historical Symbolisme and Mythography in the Occitanist and Félibrige Movement, *Contemporary French Civilization*, III, no.1 (Fall, 1978).

Archive parlementaires, Première série, Tome XCI, Centre national de la recherche scientifique, 1976.

Adachi, Mina, The Role of Symbols in the Formation of Nationalism in France: On Caesar and Vercingetorix—, *Bunmei (Civilization)*, Tokai University Research Institute of Civilization, No.23, 2018 (in print).

福留邦浩, 「「フェリブリージュ」運動の形成とその理念－地域言語復興活動に内在する政治理念〈フェデラリズム〉をめぐって－」, 『立命館国際研究』22・2号, 2009年。

アンダーソン, B., 白石隆, 白石さや訳『定本 想像の共同体』, 書籍工房早山, 2018年。

ジオルダン, H., 原聖訳『虐げられた言語の復権』, 批評社, 1987年。

ミストラル, F., 杉富士雄訳『ミストラル『青春の思い出』とその研究』, 福武書店, 1984年。

図版一覧

図版1: 2016年3月5日, 安達未菜撮撮影

図版2: 2016年3月5日, 安達未菜撮撮影

図版3: 2016年3月13日, 安達未菜撮撮影

¹ Smith, Nathaniel B. (1978), Historical Symbolisme and Mythography in the Occitanist and Félibrige Movement, *Contemporary French Civilization*, III, no.1 (Fall, 1978), pp. 47-69. (引用は p.47.)

² ジオルダン, H., 原聖訳, 『虐げられた言語の復権』, 批評社, 1987年, p.8.

³ Cassirer, Ernst, *An Essay on Man*, Yale University Press, 1992, p.27.

⁴ Ibid., p.33.

⁵ Ibid., p.32.

⁶ *Archive parlementaires*, Première série, Tome XCI, Centre national de la recherche scientifique, 1976, pp.318-327.

⁷ アンダーソン, B., 白石隆:白石さや訳, 『定本 想像の共同体』, 書籍工房早山, 2018年, pp.147-148.

⁸ 19世紀フランスにおけるナショナル・シンボルに関しては, 以下の拙著において検討している:

Adachi, Mina, The Role of Symbols in the Formation of Nationalism in France: On Caesar and Vercingetorix—, *Bunmei (Civilization)*, Tokai University Research Institute of Civilization, No.23, 2018 (in print).

⁹ フェリブリージュ創設時のルーマニーヌの重要性に関しては, たとえば以下に指摘されている:

Martel, Philoppe, *Les Félibres et leur temps, Renaissance d'oc et opinion (1854-1914)*, Presses universitaires de Bordeaux, 2010, p.151.

-
- ¹⁰ フェリブリージュ創設に関するルーマニーユ、ミストラルを始めとするメンバーに関しては、リペールの書に詳細が記されている。ここでは以下を参照した：
Ripert,Emile, *Le Félibrige*, Arman Colin, 1938.
- ¹¹ Jouveau, René, *Histoire du Félibrige 1854-1876*, 1984, p.29.
- ¹² フレデリック・ミストラル、杉富士雄訳、『ミストラル『青春の思い出』とその研究』、福武書店、1984年、p.561.
- ¹³ Ibid., 360頁。
以下も参照した：
Mistral, Frédéric (2010), *Mes Origines Mémoires et Récits*, Éditions Auberon, p.251
- ¹⁴ Rostaing, M. Charles, *Correspondance Adolphe Dumas-Fréderic Mistral 1856-1861*
- ¹⁵ Lamartine, Alphonse de, *Cours familiar de littérature*, 1859, pp.233-246.
- ¹⁶ Ibid., p.245.
- ¹⁷ 福留邦浩「「フェリブリージュ」運動の形成とその理念－地域言語復興活動に内在する政治理念(フェデラリズム)をめぐってー」『立命館国際研究』22-2号、2009年10月、p.251(p.445).
- ¹⁸ たとえば、パリで記者として活躍するユーゼィエヌ・ガルサン (EugèneGarcin) は、『北仏人と南仏人』(*Les Français du Nord et du Midi*)において、ミストラルを批判している。ガルサンは、フェリブリージュ創設の直前までその一員である。Garcin, Eugène, *Les Français du Nord et du Midi*, Éditions Didier et Cie, Paris, 1868, p.123.
- ¹⁹ Ibid., p.249 (p.443).
- ²⁰ しかし、本心は連邦主義思想を抱いていたようで、同年「フェリブリージュ」とカタルニヤの詩人たちは、会合を開き（そこには、ヴィクトル・ユゴーも参加していた）、そこにおいてミストラルは「それぞれプロヴァンスとカタロニアが、かつての栄光を奪回しよう」、「穩健でしかし自覚的で誇り高き、眞のプロヴァンスのナショナリズムを打ち立てよう」と述べている。René Jouveau, op.cit., p.235.
- ²¹ Jouveau,René, *Histoire du Félibrige, 1876-1914*, Nîmes, Imprimerie Bené, 1970, p.222. Jouveauは、ミストラルはこの式典には出席せず、式典後のパーティーに参加したと指摘している。
- ²² Baudin, Grérard, *Frédéric Mistral, Illustré et méconnu*, HC édition, 2010, p.96.
- ²³ フェリブリージュの構成員をこのように呼んだ。
- ²⁴ Jouveau,René, *Histoire du Félibrige, 1876-1914*, Nîmes, Imprimerie Bené, 1970, pp. 355-358.
- ²⁵ Baudin, Grérard, *Frédéric Mistral, Illustré et méconnu*, HC édition, 2010, pp.107-112.
- ²⁶ Ibid., p.129.
- ²⁷ Ibid., p.28.